

# 生活戦略からみる炭鉱社会像の再考

——北海道岩見沢市朝日町における「出面取り」の事例から——

木 村 至 聖

## Re-imagining Coal Mine Community : From the Case Study of “Demen-tori”

KIMURA Shisei

**Abstract :** This paper analyzes the example of labor practice called “Demen-tori” performed at the Asahi coal mine in Iwamizawa, Hokkaido in the 1950s. “Demen-tori” is a dialect of Hokkaido referring to day labor. As illustrated by the example of this paper, the women in Asahi coal mine, in the face of the crisis of community caused by its closure, attempted to support the household economy by working in groups at the neighboring farm villages in order to overcome this crisis. This paper aims at reconsidering the image of coal mine community by showing clearly what kind of social condition made this “Demen-tori” possible and how it was organized.

### 1 はじめに

「炭鉱」というと、いまだに多くの人々が「暗い」というイメージをもっているかもしれない。地底の暗闇での危険で厳しい肉体労働、一度に多くの犠牲者を出す炭鉱事故、斜陽産業となつてからの相次ぐ閉山、それにともなう大量の失業者と地域社会の急速な衰退、さらには戦時中の「強制連行」<sup>1)</sup>……。写真家・土門拳の写真集『筑豊のこどもたち』はあまりに強烈であり、幾度もドラマ化・映画化されている五木寛之作の『青春の門』（筑豊・田川が舞台）は退廃した炭鉱街のイメージを再生産してきた。また、2007年に、有名な産炭地であった北海道夕張市が財政再建団体に指定されたのも記憶に新しい。報道では、炭鉱閉山後の夕張市がいかに無茶な観光開発を行っていたか、という側面が強調されることが多かったが、そもそもそうした観光開発を行なった夕張市の危機感も、以下のように炭鉱の「暗い」（と思われているという）イメージからきたものであったことには注意すべきであろう。

観光開発についての施策の基本としては、疲弊した夕張の暗いイメージを払拭させ、他からの来訪者に期待がもてる町に変え、魅力のある町として企業立地が図れることができることを目標としたものである（夕張市史編纂室編 1991：34、傍点筆者）

その一方で、近年炭鉱をめぐる「明るい」ニュースとしてあったのは、2011年に山本作兵衛の炭鉱画がユネスコの世界記憶遺産（Memory of the World）に登録されたことだろう。世界記憶遺産は日本人にとってはまだ馴染みの薄いものかもしれないが、れっきとしたユネスコの三大遺産事業の一つであり、今回は日本政府によってではなく、福岡県田川市と福岡県立大学共同の推薦で日本初の登録となったという点で画期的な出来事であった。だがここで注意しなければならないのは、山本作兵衛の炭鉱画は、炭鉱労働、炭鉱社会の豊饒な世界を描いているものの、あくまで筑豊の小炭坑の、ある一時代の姿を描いたに過ぎないということである。さらにそこには、炭鉱労働だけでなく、生活の様子や遊びなどの様々な風俗が描かれているが、なかでもとくに、狭い坑道で裸で作業をする姿

や、刺青をした労働者の姿ばかりが目立ちがちであり、作兵衛自身が余白に記した詳細な解説文はしばしば見落とされている。こうしたことの背景には、「一般社会」から逸脱したものとしての自らの炭鉱のイメージを見ようとする社会的なまなざしがあるのではないだろうか。

このように、特異なものとしての炭鉱のイメージと、筑豊、夕張という土地の名は分かちがたく結びつけられているようである。だが、国内の炭鉱は筑豊や夕張だけではないの言うまでもなく、またそもそも筑豊と北海道の炭鉱とでも多くの点が異なる。中小炭鉱が多かったため 1950 年代になだれをうって閉山が相次ぎ、大量の失業者を出した筑豊に対し、北炭や三菱などの大手炭鉱が多かった北海道の炭鉱は、1970 年代以降に日本の石炭生産の過半を占めるようになった(中澤 2011)。大手炭鉱、そして比較的遅くまで残っていた炭鉱ほど、労働現場の機械化・組織化も進んでおり、山本作兵衛の炭鉱画に描かれているような、ツルハシなどを使った手掘りの労働現場からは大きくかけ離れてくる。また、戦後労働運動の成果として、炭鉱会社による福利厚生はますます充実し、会社側も合理化の一方でそうした施策を積極的に推進することで、良質な労働力の確保・再生産に努めた。これにより、労働だけでなく、生活の面でも、地域・時代によって炭鉱社会の姿というのは大きく異なっている。それゆえ、画一化された「暗い」、貧しい、厳しい炭鉱イメージに対して、違和感を持つ炭鉱経験者も多い(たとえば、吉岡 2012)。

こうした一面的な炭鉱社会像に対し、本稿が目指すのは、北海道岩見沢市にあった朝日炭鉱<sup>2)</sup>の事例である。とくにここでは 1950 年代、炭鉱の一時休山という危機を救った、女性たちの「出面取り」<sup>3)</sup>に注目する。「出面取り」とは、北海道の方言で日雇いのアルバイトのような仕事を指す言葉であり、本稿では、炭鉱マンの妻たちが家計を助けるために近隣の農家に手伝いに行く事例をとりあげている。もっとも、これは規模からすれば小さな事例であり、資料も乏しく、数少ない聞き取りから描き出すには確かに無理があるかもしれない。しかし、それでも記録する意義があると思われるのには理由がある。

第一に、本事例が炭鉱の世界の豊饒さを描き出す好例だからである。炭鉱はその地理的条件や、経営側の厚い福利のため、比較的独立した、閉じた社会を形成していると考えられてきた。だが、この朝日の事例は、炭鉱集落が近隣の農業集落と密接に関わることで

存続しえたことを示すものであり、どのような社会が形成されるかには、その地域の文脈など、様々な要素が影響していることが明らかになる。第二に、この事例は、失業という生活の危機にあっていかに生き延びるか、という危機に対して、人々(家族、労使、地域社会)の助け合いが持つ普遍的な可能性を示してくれるからである。実際、炭鉱という世界は多様で豊饒な世界であるとともに、「一般社会」と同様に人々が労働し、生活していくために様々な工夫や努力を重ねて築き上げられてきた社会であった。にもかかわらず、それを特異なものとして、「一般社会」から排除し、忘却し、あるいは画一的なイメージのもとに押し込めてきたのが近代、そして現代の日本社会ではなかったか。本稿は、そうした炭鉱をめぐる事例の一つに注目し、人が自らのもつ様々な資質や資源を動員し、かつ他人と結びつきながら、生活を営んできた事例を通して、一面的な炭鉱社会像を再考しようという試みの一部である。

## 2 朝日炭鉱の概要

### 2.1 万字線と石炭産業

まずここで紹介する事例の舞台について概観しておこう。その舞台とは先述の通り朝日炭鉱という炭鉱のあった岩見沢市朝日町だが、その地域の特性をみる上で、旧国鉄万字線<sup>4)</sup>の存在は見落とすことはできない。図 1 のように、万字線は室蘭本線の志文駅(岩見沢市)から分岐し、夕張炭鉱と山一つ隔てた万字炭鉱のある万字炭山駅(空知郡栗沢町、現・岩見沢市栗沢町)までを結ぶ路線で、1914(大正 3)年に全線が開業した。万字炭鉱は、夕張炭鉱を経営する北海道炭礦汽船株式会社(以下、北炭)が 1905(明治 38)年から本格操業開始したが、万字線沿線ではより早くから拓けたのは上志文であり、1888(明治 21)年の夕張炭鉱の発見をきっかけに岩見沢と夕張を結ぶルートが形成され、その途上にある上志文には徳島・富山県人が相次いで入植したという(岩見沢市・栗沢町 1986)。朝日炭鉱の開坑、および朝日の市街の形成は、明治 40 年頃に上志文の人物が朝日の石炭を志文や岩見沢市街地に運び販売したのがきっかけとされる(岩見沢市 1963)。またこの頃から上志文地区では水稻が盛んになり、のちの農業地帯としての基礎が作られていった。万字線は、こうした石炭や農作物、そして木材の輸送への要請から建設されたのであり(岩見沢市・栗沢町 1986)、この沿線に、上志文、朝日、美流

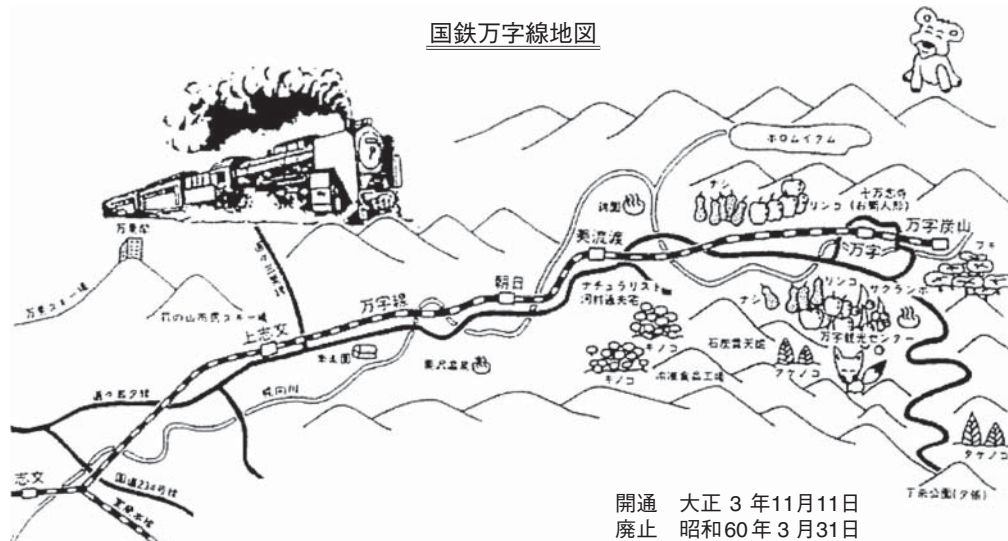


図1 国鉄万字線地図（岩見沢市『万字線鉄道資料館』資料より）

渡，万字といった主だった集落が形成された。

朝日での石炭採掘の始まりは先述の通りだが，以後鉱業権<sup>4)</sup>は変遷し，1940（昭和15）年に日本硝子株式会社が自社の原料炭として使用するため，鉱業権を譲りうけて事業を継承した（岩見沢市1963：1060）。さらに戦後，1949（昭和24）年3月に朝日炭砒株式会社に鉱業権が譲渡されて閉山まで継続した。採炭切羽は炭層傾斜が80°以上の急傾斜であったため，ほとんど機械に頼ることのない，熟練の必要な急傾斜採炭<sup>5)</sup>が行なわれ，採掘された石炭は主に家庭や工場のボイラー用ストーブに用いられた。従業員数はピーク時の1960（昭和35）年でも433人（うち直轄鉱員225人）という小規模な炭鉱であったが，病院，保育所，従業員住宅といった福利厚生施設を会社が設置しており（朝日炭砒株式会社1963），コンパクトにまとまった炭鉱集落であったといえるだろう。

だが不幸にして，1972（昭和47）年に9名が亡くなる坑内のガス突出事故により，採炭現場をより深部に移行せざるを得なくなり，新鉱開発を計画するも道炭労の反対にあい挫折<sup>6)</sup>，1974（昭和49）年12月にあえなく閉山となった。ちなみに，万字線沿線では万字炭鉱が翌年閉山するとともにほぼすべての坑内掘り炭鉱は姿を消し，万字線も1978（昭和53）に貨物営業を廃止し，1985（昭和60）年には全線が廃止されることとなった。

## 2.2 「朝日」という町——近隣集落との関係

それでは，この朝日炭砒によって発展した朝日の町はどのような集落だったのだろうか。地理学者の川崎

茂は，資本主義体制下における鉱山集落を一つの企業体としてとらえ，日本の代表的な鉱山集落を単一企業集落 *single-enterprize community* という視角から分析している。川崎（1973）によれば，鉱山集落は鉱山事業所地域を中核として，鉱山従事者の住宅地域，商業などそのサービス機能地域の3機能から構成されており，島や山間部など空間的孤立性の強いところほど，企業が労働力保持のため後の2機能への投資を強める。その最たるものとして，山間部の夕張や離島の高島・端島（長崎県）が挙げられている。

すると朝日はどうであろうか。前節でふれた通り，朝日は上志文という農業集落と隣接していることが特徴として挙げられる。とくに戦後食糧難の時代，このことは非常に大きな意味を持った。1946（昭和21）年，朝日炭砒に就職して当時の事情を知る竹林博さんは，以下のように語っている。

当時生活内容にしても，石炭増産のための特配など，国がやりましたから，まあ食糧事情はよかったです。……すぐ近所に上志文とか，農家のうちがあったから，三度の食事が野菜ばかりとか，かぼちゃが多かったとか，やはりみなさんが工夫もあったでしょうけどね，お米を食べられる地域的な環境のよさ。<sup>7)</sup>

また少し遠いが，朝日から20キロメートルほど離れた栗山という集落からもゴボウを売りにきていたといい<sup>8)</sup>，終戦直後にはすでに炭鉱集落と農業集落の間で行き来があり，自然と顔見知りの多い関係が出来上

がっていたことが推測される。また、朝日にはそれだけの「オープンさ」があったと竹林さんは語っている。

(大手の) 三菱あたりだとだいたい詰所があってね、そこでがっちり押さえてますからね。出入りするのでも普通だと「鑑札」渡してね、商売するとか、そういうのがあるけど。朝日だと……外勤がいってもね、別にそんな手厳しいこと言いませんから。<sup>9)</sup>

またこうした開放的な関係は、炭鉱集落の内部にもあった。それは、しばしば炭鉱では身分制度に擬せられる職員と鉱員の関係について語られている。

大手ですと、職員の住宅はここから、こっちは鉱員だと、地域的な線は引かれてたけど、朝日の場合、風呂入るのでもね、職員も鉱員もなし。学校の先生だって鉱員の風呂に入って。そういう点は大手とは全く格差のない、オープンな(関係)ね。<sup>10)</sup>

以上のような、集落内外での開放的な人間関係は、朝日の特徴であるといえるだろう。その大きな条件として考えられるのは、第一に朝日炭鉱が三井や三菱、北炭などの大資本による炭鉱ではなく、小規模な炭鉱だったことが挙げられるだろう。企業が学校や病院など集落に必要な最低限の要素は面倒をみつつも、先の川崎の言う鉱山集落の 3 機能をすべて占有する自己完結性を目指すことはなかったのである。そして第二に、炭鉱とは性質の異なる農業集落との近接性である。山を一つ隔てた谷あいの夕張とは異なり、朝日は万字線沿線でも比較的岩見沢市街地に近い位置にあり、市街地近郊に形成された上志文など複数の農業集落と隣接していた。つまり、小炭鉱である朝日炭鉱が集落機能の占有を仮にできたとしても、あえてする必要がない地理的条件があったのであり、それが朝日における開放的な人間関係を形成したと考えられる。

### 3 炭鉱の閉山という危機

このように、朝日炭鉱は万字線沿線の炭鉱のなかでも小規模ながら、1972 (昭和 47) 年の坑内事故までは労使協調で堅実な経営を続け、集落としての朝日町もコンパクトながら開放的で家族的な雰囲気を形成していた。その基礎となった近隣農業集落との良好で有機的関係は、たんなる地理的な近接性だけから可能と

なるものではない。そこには、実際に両集団の関係をとり持つ主体がいて、葛藤や交渉、妥協や工夫の上に朝日炭鉱の存続を可能にした近隣集落との有機的関係を築き上げたのである。その関係の形成過程、そして実際に両集落でどのような関係が結びついていたのか、それを知るための手がかりとして 1954 (昭和 29) 年の炭鉱一時閉山 (休山) という危機についてみてみたい。

1954 (昭和 29) 年 4 月、土砂崩れ事故により朝日炭鉱は資金繰りが悪化し、労働組合は賃金未払いに対して 5 月からスト、ロックアウトに入る。これに対し、会社側は 5 月 31 日、全員を解雇し、一時閉山を余儀なくされる。つまり、炭鉱に依存していた地域の人々の生活が完全に宙に投げ出されてしまったのである。以下では、この閉山という危機に対して当時の朝日の人々がいかに対処したのかについてみていきたい。

#### 3.1 一時「休山」という暗黙の了解

もっとも、この「閉山」というのも、「意味ありげな」ものだったという。というのも、炭鉱は完全に放棄されてしまったわけではなく、将来的な再開を視野に入れて、経営者側と道炭労との話し合いのもと「生産管理」が行なわれていたのである。通常の採炭現場での採炭は大量の火薬が必要となるため、坑道の維持・補修のかたわら、必要最低限の火薬を使って家庭用の石炭だけは出炭されていた。そのため、坑内保安の確保のために必要な坑内職員や、採炭・掘進の経験のある人など一部の組合員だけは生産に従事することができたが、それでも総従業員の「7 割近く」は仕事できなかったという。

その一方で、あくまでも一時「休山」であり、いずれは生産が再開されるという労使の暗黙の了解のもと、会社側も従業員を朝日にとどめるための様々な援助を行なった。たとえば、給料の前借りというかたちで、会社の配給所で使える「証明」を発行したり、社宅の家賃や会社が運営する病院での医療費の支払いを猶予したりするなどの措置である。その結果、一時閉山から半年後の 11 月に生産が再開されたときにも、従業員の大半は朝日に留まっていたという<sup>11)</sup>。

#### 3.2 閉山中の苦境

こうした炭鉱再開への暗黙の了解を支えた、経営側の会社再建への意思の表れとして挙げられるのが、岩見沢市の援助を受けた上水道工事である。岩見沢市の

記録によれば、この上水道工事は一時閉山以前から待望されていた事業であったことがわかる。

岩見沢市朝日町は、国鉄万字線朝日駅の西北にある朝日炭鉱によって発達した市街であるが、この地区は従来井戸水及び流水を止揚し、例年渇水期には深刻な水不足を招来し、飲用はもとより衛生上憂慮される苦境に置かれていた。これを一挙に解決すべく、昭和二十八年六月、事業の認可を受け、昭和二十八、二十九両年度にわたる継続事業として、国庫並びに道費の補助等、総工費九百万円余をもって、昭和二十九年一月三十一日工を起し、三十年三月二十五日竣工を見た。（岩見沢市水道部上水道史編纂委員会編 1978：361）

この上水道工事が閉山の時期に重なったのはしたがって偶然ではあるが、閉山したにもかかわらず、この事業が着手され、継続したということは、朝日にとっては大きな意味を持っていた。閉山当時、職員組合の副委員長であり、この上水道に関わるダム建設工事の責任者でもあった竹林博さんは、以下のように語っている。

債権者も、上水道着手したことの口実っていうか、ヤマが立ち直るきっかけになる工事をやるんだったら市の協力もいただいて、ぜひ成功させてくれと。それがやっぱり働く人の定着ができるかけがえのないシンボルだから。<sup>12)</sup>

また、一時的な働き口という意味では、この上水道工事に加えて、道路の舗装工事などがあった。1954（昭和29）年には国体開催にともない、戦後初の昭和天皇北海道巡幸が実現した。その際、岩見沢の一条通の舗装工事が行なわれ、その期間がちょうど朝日炭鉱の閉山時期と重なっていたのである。

今みたいな機械化された舗装じゃないんですよ。野外で鍋で石炭炊いて、材料熱処理して作って。それで今みたいにダンプカーなんてないから、大きな鍋みたいのに入れて持ってってね。<sup>13)</sup>

このように、非常に重労働ではあったものの、こうした事業にともない一時的な雇用が発生したことで、炭鉱で失業した朝日の一部の男性たちは、ひとまず臨時の仕事を得ることができた。とはいえ、炭鉱操業時

と比べれば雇用されうる人数、給料などの面でも、朝日の人々の生活を支えるにはとても苦しい状況であったことは間違いない。そんななかで、人々の生活と朝日の再建を支えたのは、女性たちであった。

#### 4 近隣農村への「出面取り」

##### 4.1 当時の農村の状況と出面取り

朝日炭鉱の広報紙として発行されていた『広報あさひ』第30号をみると、朝日の女性について、「一番感心するのは良く働くこと」、「春夏秋冬、四季にあつた農業やその他の仕事に出かける」（『広報あさひ』30号、昭和45年12月9日）と書かれている。ここでの「農業」とは、「出面取り」のことを指していると思われる。すでに第1章でも説明したが、出面取りとは北海道の方言で日雇いの労働のことを指し、朝日では上志文など近隣の農業集落に出かけて行って、田植えや稲刈りなどの季節労働に従事することが一般的であった。この「出面とり」は、朝日では生活のなかに溶け込んだ風景となっていたようである。

慣れてる方は頭下げて（田植えを）やってるでしょ。ですからね、顔が腫れてくるんですよ。車で帰ってきて朝日炭鉱の商店街行くと、その当日もらった現金ですぐね、おかずを買ったりして帰る。そのときお母さんのむくんだ顔があったり……。<sup>14)</sup>

1950年代は米の増産への社会的要請の一方で、農家では人手不足の状況が続き、ここ岩見沢でも問題は深刻であった。これについて北海道総合経済研究所は以下のように記録している。

戦後一九五三年ごろから北海道の農家人口が減少傾向をたどり始める。これは、戦時、戦後において帰農、開墾入植、分家および食糧自給の目的からにわかに膨張した農業就業人口が、次第に食糧需給が円滑となって不安感が払拭され、他産業の復興が緒について年における雇傭が増加するにつれて、再び減退に転じたことによるものであるが、こうした形の減少を続けるうちに、一九五五、五六年にいたって経済成長に伴う農業人口の「地すべりの」減少へと発展していった。（北海道総合経済研究所 1963：795）

こうした背景から、臨時雇・季節雇である「出面さ

ん」への需要は高まり、「出面賃」も高騰していった。農業機械もまだ一般的でない時代、稲刈りなどの作業は人力に依存していた。朝日炭鉱が閉山した 1954 (昭和 29) 年という時期はまさにこうした時代にあり、地理的にも恵まれた条件で、農業集落と炭鉱の閉山した朝日との間で利害が一致したのである。第 1 章でもみた通り、もともと朝日は地理的にも稲作地帯に近かったこともあり、石炭と米の物々交換なども行なわれていたというのが<sup>15)</sup>、閉山の年には朝日の女性が集団を作って近隣の農家まで「出面取り」に行ったという。

集団を作った朝日の女性たちは、農家から迎えにくる車の荷台に乗り、10～20 分ほど距離の上志文、40～50 分ほどの北村などに働きに出た。主に田植えのような集中的に人手を要する作業に従事するので、働ける期間は一年間に一か月ほどしかないが、当時の田植えの時期は 5 月の中旬から 6 月中旬頃であり<sup>16)</sup>、それが朝日炭鉱が閉山した時期と重なっていたことも幸いして、朝日の人々の生活を大いに助けることになった。また、限られた期間ではあっても、先述の通り当時「出面賃」は急騰しており、しかも現金当日払いであったことが魅力であった<sup>17)</sup>。

そして、農家からの評判のいい出面取り集団は、他の集落からも声がかかり、少しずつ時期をずらして仕事を請け負っていくことによって臨時の収入を少しでも長く得ることができた。閉山当時、朝日には 2～3 人からなる小さい組を含めて、5 組ほどの出面取り集団があったという。そのなかでも、70 人を超える最大の集団を組織し、当時 15～20 軒あった上志文の農家すべての仕事を請け負ったのが、金子清子さんの組織する集団 (組) であった。当時朝日の世帯数は 200 程度だったので (朝日炭鉱株式会社 1963)、一世帯から一人の女性が働きに出ていると考えるとおよそ三分の一の世帯が、金子さんの組織する組で夫の失業中の生計を立てたとみることができる。

金子さんの組が最大になったのは、やはり農家からの評判がよく、それだけ多くの仕事を請け負うことができたからである。それでは、金子さんはいかにしてこうした農家からの信頼を勝ち取り、この最大の集団を組織したのだろうか。

#### 4.2 炭鉱が閉山になって

金子清子さんは、朝日にほど近い、栗山の農家の生まれである。子どもの頃から、家の仕事を手伝っていたが、その当時から「出面さん」が手伝いにきてお

り、金子さんはその仕事ぶりをずっと見てきた。

実家農家だからね、出面さんのごはん炊くのが私の仕事さ。田んぼ出る時間はあんまりないの。だけど昼になったら、ちょっと時間あれば手伝いなさいよっちゅって、なんばか。そしたら出面さんたちがね、のろけ話して、それを聞きたくて (笑)、顔赤くしながら。離れたら聞こえないから、遮二無二ついて歩いたもんだよね。出面さん方って、黙ってなんてやってないから。一日中うつむいてるから、うちでこうだったとか、ああだったとかって、おのろけ話やら、泣き言やら、そんなこと言いながら植えてるんだからね。<sup>18)</sup>

朝日には、1949 (昭和 24) 年、朝日炭鉱の鉱務所書記をしていた男性と見合い結婚をして移ってきた。夫と夫の父と同居し、結婚の翌年に長女、翌々年に長男が生まれた。そんなとき、朝日炭鉱が閉山になったのである。

長男長女が生まれたころは、(朝日炭鉱も景気がよく) 何の苦労もなしに、家庭の心配なんてしたことないもん。それがいきなりだよ、収入ないっていったら、面くらうでしょ。子ども二人いて、じいちゃんが体悪くしているんだからね。これは何とかしなきゃなって思っ<sup>19)</sup>。

そこで、夫は鉱務所の同僚たちと一緒に、先述の道路舗装工事に出たが、慣れない仕事の上、収入も決して十分なものではなかった。

父さんが岩見沢の出面 (道路舗装工事) に来たとき、事務所だけでかたまって行っ<sup>20)</sup>。そして土方に行ったら、三日目でマメだらけ (笑)。かわいそうになって、「あんたなんぼもらってるの」って言ったら、300 円。そのときにしたら私 (の出面賃は) 600 円なの。時間も 7 時から 6 時まで。お昼時間 1 時間と休憩時間 30 分、それで 600 円。父さんのだいたい倍もらってるの。それならおれ家で番兵 (子守) してるわって。上の子いたから。<sup>20)</sup>

#### 4.3 出面取りはいかに組織されたか

こうして、金子さんの家庭では、主に清子さんが夫の失業中の家計を支えることになったのである。初めのうちは、金子さんも他の女性が組織する出面の組に

ついて行っていた。では、いかにして金子さん自身が、朝日で最大となる組を組織するに至ったのだろうか。それにはある事件がきっかけとなっていた。

もうここまでいったら終わりの仕事だったの。それで6時の（終了の合図の）サイレンが鳴ったから、（仕事を）あがるわね。だけど仕事の「場合」があるでしょ、私に言わしたらね。もう少し、5分かそこら（で終わり）だから、「もうちょっと植えてったら」って言ったら、「サイレン鳴ったもん」って言ったから。……そしたらね、次の日、すまないけど金子さんこれから6時から常会あるから、ちょっと残ってくれないかって。そして農家のうちにあがっていったら、ちゃんご飯の支度してて、これから大事な話があるんだっちゅうわけ。金子さん、これから5人でも10人かそこらぐらいのグループ作れるかいって言うから。そのグループ作ってくれて完全にできたらね、うちの部落全部まわってもらって、……それをね、世話するから、（仕事のできる期間を）長くするからしてくれっちゅうことで。<sup>21)</sup>

農家出身で、農作業の事情をよく知る金子さんは、仕事を中途半端にして切り上げてしまうと結局農家の人に迷惑がかかることを気にかけたのである。そうした経験と、金子さんの人柄が農家の信頼を得たのだろう、にわかに組を組織してほしいと農家の側から直接依頼があったのである。

これに加えて、当時の出面取りの組と農家との間で、賃金についてもめていたという。そのことで、両者の関係まで悪化してしまっただけでなく、元も子もないと考えた金子さんは、「結局、農家側の言い分とこっち側の言い分の中に入んなきゃなんない」と、仕事の日数が長くとれるという条件を優先して、農家側の依頼を引き受けた。

やっぱりみんな旦那の仕事のない、お金のない時代だから、必死なんだわ。そんなね、100円くらい安くても、日にちさえとってもらえばいい、一日でも多く働きたいって言う、そういう考えなの。そこを農家の人が見込んだわけ。お金のことばかり言われたら困るって言うことだね。……600円と650円だったら、長続きするっちゅうことになったらどっちが得だと思う？ 50円の差でね、日にちがなかったら何もならんでしょ。そういうことな

の。<sup>22)</sup>

その一方で、農家の側も朝日の人々の事情をくんで、農作業未経験者であっても、一人前の出面賃を払ってくれたという。

（素人の出面賃と熟練者の出面賃は本来）違うけどね、そこをね、私行ったときにね、……未経験者でもいいから、金子さんいいと思ったら連れてこいって言うでしょ、（全然作業できない人を連れていっても）だけど一人前もらったの。……最初だからその人は半分（の出面賃）でいいと思ってる。うちに遊んでても病人か子供でなかったら町のなかにはないっちゅうくらいなんだからね。少しでもみんなと一緒に肩並べたいちゅうことで、誘ったりしたけど、農家の人は当たり前にかうやって（同じ出面賃を）くれた。……それを今でも恩人のように、あのとき行ったらまさか一人前の出面賃もらえると思わなかったって。<sup>23)</sup>

夫に仕事がない不自由な状況で、作業に不慣れなのにもかかわらず一人前の賃金をもうらことができたことは、炭鉱閉山中の朝日の女性たちにとって家計を支えることができただけでなく、大きな励みになっただろうことは想像に難くない。金子さんが出面に誘ったある女性は、その日もらった出面賃を、「もったいなくて使えなくて神様にあげた」<sup>24)</sup>というような話も聞いた。

こうして、閉山の年の5月から6月にかけて、金子さんは農家の要求を訊きながら、とにかくその日の生活費がほしい朝日の女性たちに仕事を割り振りする「番割り」に奔走した。

朝晩家の玄関の前に20人も30人もたまるの。明日私どこ行くんだ、明日私どこ行くんだと。うちに帰ったらすぐね、農家からも来てるでしょ、そのうちは5人要るとか、ここのうちは3人とか、ここは10人とか。そしたらここの家は何日がいいとか、こっちは何日がいいとか、うまく割り振りして。そしたらぶつかるでしょ、同じ農家でも早く植えたいんだから。そして素人もいるから、慣れてる人と慣れない人を混ぜて。……いま息子が言うのでは、母さんのあの姿、絶対忘れられないって。<sup>25)</sup>

こうして金子さんのもとには仕事を求める朝日の女



性たちと、信頼できる働き手を求める農家が集まり、やがて朝日で最大の出面取り集団ができた。地理的にも近い農業集落の側のニーズと、炭鉱集落の側のニーズが合致したことが、この朝日における「出面取り」の事例の前提となっているが、ここでみてきたように、その両者の利害に誠意をもって向き合い、その関係をコーディネートできる信頼できる結び目として、金子さんの役割が非常に大きかったということは間違いないだろう。

とにかくね、農家の人っちゅうのは正直だから。絶対誠意で付き合わなかったらね、ヤマかけたりね、ハッパかけたりしたらダメなの。これしかできないからこれだけはやるからとかってね、自分の能力の範囲内をちゃんと報告しないと。そしたら義理もあるかもしれないけど、誠心誠意やってくれてるんだから、こっちもその気になってっていうことだね。<sup>26)</sup>

#### 4.4 再建後の様子

さて、こうした金子さんら女性たちの支えで、炭鉱閉山中の朝日の家庭生活はなんとか守られた。閉山の半年後の 11 月、朝日炭硯は生産を再開し、金子さんは炭鉱主婦会に「内助の功」ということで表彰された。その後、朝日炭硯は 1974 (昭和 49) 年の閉山直前まで、小規模の炭鉱としては異例の長期間にわたって、労使協調で堅実な経営が続けられた。

一方、金子さんの家では、義父が炭鉱再開直前の 10 月に亡くなり、再開後の年明けに次女が生まれたため、出面取りは数年休んだ。その後、子どもが幼稚園に入ったのをきっかけに、出面に復帰したが、その頃にはみな個人個人で出面に行くようになっており、農業機械も入るようになっていったため、一時閉山当時のような大規模な出面取りはもう行なわれていなかったという。

### 5 考 察

以上、炭鉱の一時閉山という危機にあたって、朝日炭硯の女性たちが行なった「出面取り」の事例についてみてきたが、この事例が従来の一面的な炭鉱社会像を再考する上でいかなる意味をもつのか、検討しておきたい。

まず確認しておきたいのは、炭鉱社会は、冒頭でふれたように「暗い、貧しい、厳しい」といった、ある

種の漠然とした負のイメージによって覆われているだけでなく、戦後長らくも「一般社会」から逸脱した特異な社会として扱われてきたということである。問題は、いわばこの炭鉱社会の他者化、ブラックボックス化によって、炭鉱社会の「暗さ、貧しさ、厳しさ」が、近代日本社会が共有すべき本質的問題として捉えられず、またそこで営まれてきた人々の多様な生活戦略が記憶されないまま忘れられようとしていることにある。とくに炭鉱の地下労働という性質が、この炭鉱社会のブラックボックス化の源泉となり、山間部や島嶼部の自己完結した炭鉱社会のイメージがその他者化を促進したと考えられる。これに対して、本稿でみてきた朝日炭硯の事例は、近隣の農業集落と有機的に結びついていたこと、そして女性がまさにその関わりの主体となり、炭鉱の危機の際に家計を支えたことなど、炭鉱社会の多様性を示す例の一つとして、記憶されておくべきことであろう。

女性の役割という点でも興味深い。戦前の炭鉱、とくに九州の筑豊など、自然条件として炭層が薄く、採炭過程が手作業に限定されていた小炭鉱では、女性の坑内労働も行なわれていた。こうした坑内労働は一般的には後山夫のことを指し (野依 2010)、石炭を採掘する先山夫に対して、掘り出された石炭を坑外まで運搬する仕事であった。坑内労働はかなりの高賃金であったが、1900 年代に入って女子の保護などの名目で衰退し、1928 (昭和 3) 年には鉱夫労役扶助規則改正によって禁止された<sup>27)</sup>。この背景に、坑内保育所や炭鉱主婦会、生活改善運動によって、女性の「主婦」役割、「母性」イデオロギーが広がり、炭鉱女性の「主婦」化が進んだことも指摘されている (野依 2010)。

視点を戦後の炭鉱に移すと、1955 (昭和 30) 年に成立した石炭鉱業合理化臨時措置法に端を発するスクラップ・アンド・ビルド政策のもと、財閥系の大手炭鉱には人員と資源が集中され、社宅をはじめ、学校、病院などの福利厚生施設はますます充実し、炭鉱女性が「主婦」化できる条件は一層整備されていった。その一方で、それぞれが小規模で機械化が困難な自然条件であった筑豊の炭鉱は次々に閉山していった。

朝日炭硯は、どちらかといえばその規模、機械化が困難な条件などの点などからしても、戦後の筑豊の炭鉱に近かったといえる (保育所、病院が完成したのは 1964 (昭和 39) 年)。にもかかわらず、朝日が一時閉山を経つつも奇蹟的な再建を遂げ、なお 1970 年代まで存続しえた背景には、女性が「主婦」化できるほどの豊かさはなかったものの、ほどよい近さに人手を必



要とする農業集落があり、炭鉱の危機に際してそうした農業集落との関係を取り持ち、女性たちを巧みに組織したアクターがいたことが指摘できるだろう。しかも、かえってこうした困難のなかで、職員と鉱員、経験者と非経験者の分け隔てなく、女性たちがみな同じ一人前の出賃をもらえたということが、朝日独特の開放的で一体感を形成するのにも寄与したと考えられる。

## 6 む す び

第2章でもみた通り、1972（昭和47）年、朝日炭鉱では坑内のガス突出により9名が亡くなる事故があり、その後賃金交渉のもつれから1974（昭和49）年に炭鉱は閉山に追い込まれる。前年のオイルショックにより、石炭見直しがかねがねななかでの閉山であった。それから約40年経ち、大手資本によらない小規模炭鉱であった朝日が、一度の閉山の危機を乗り越えて再建し、この時期まで存続してきたというこの注目すべき事例は、ほとんど記録もなく、忘れ去られつつある<sup>28)</sup>。だが、以下のような竹林さんの矜持も含めて、朝日の事例は日本の炭鉱をめぐる歴史のなかで記憶されるべきことであろう。

ヤマもちろん借金はいしてましたけどね、石炭政策に対する協力の理解を得られるような経営をしてたっていうことは、中小でも朝日炭鉱はお手本になったんじゃないかと思いますけどね。普通ですとね、大手のがあって、子会社が入ってやるのが中小炭鉱なんだけど、うちは中小炭鉱であって、大手と全く縁がなかったですからね。……あまり大手の看板で再建したんじゃないくて、中小の朝日炭鉱独自の色合いでヤマが成り立ったっていうことはね、そこまでみなさんからは書かれてはいませんがね、内容的には僕はよかったと思う。<sup>29)</sup>

ここでの「朝日炭鉱独自の色合い」とは、小規模ならではの顔の見える関係を活かした、労使の、そして近隣の農村との信頼関係のことを指すのではないかと筆者は解釈する。そして、その信頼関係を築くためのミクロな生活戦略が、本稿で紹介した女性たちの出賃取りの事例から読み取れるのではないだろうか。

最後に、朝日炭鉱で最大の出賃取り集団を組織した、金子清子さんのその後についてふれておきたい。朝日で閉山の危機を家族で協力して乗り越え、三人の

子どもに恵まれた金子さん一家は、1963（昭和38）年、夫の転職にともない岩見沢市に転出する。石炭から石油という情勢の変化を感じとって転職を考えた清子さんの夫は、職業安定所で偶然岩見沢にある農機具会社の求人をみつけ、その事務の仕事に就いたのである。折しも、農業が急激に機械化されていく時期に重なり、田植えや稲刈りも出賃取りに依存する必要性がなくなってきていた<sup>30)</sup>。金子さん一家の転身は、まさに絶妙のタイミングだったのである。そしてその後の生活においても、朝日炭鉱の時代に築いてきた人間関係が、新しい職場でも大いに役立ったという。

父さんが農機具（の会社）入ったでしょ。そしたら農機具の「の」の字も知らないでしょ。事務員なんだけど一応は外交もしなきゃならない。……最初はね、油売りをさせられたの。……そしたら父さん、上志文ずーっと歩きなさいって。全部知ってるでしょって。父さんも協力してくれた家内のおやじだっちゅうことで、行ったところ行ったところ油買ってくれたの。<sup>31)</sup>

こうした、自らの置かれた環境のなかでもてる資源を動員し、人と人との結びつきによって生き延びていく生活戦略には、現代社会を生きる我々も学びとることができる普遍的な示唆が含まれている。炭鉱の歴史は、何も夕張、筑豊ばかりではない。たしかに規模や知名度において、両者は日本の炭鉱を代表するものだったかもしれない。そして朝日炭鉱の事例は、炭鉱社会の像を描くにはあくまで例外的な特殊事例だったかもしれない。だが問題にすべきなのは、それぞれの現場で人々が切り拓いてきた様々な生き延びのドラマが、近現代日本史のなかで、夕張・筑豊中心の炭鉱社会像（しかも一面的な）へと収斂され、忘れられつつあるということである。本稿の事例は、日本の炭鉱のなかでもさらに周縁化された一つの小炭鉱の事例ではあるが、そこで人々が力強く営んできた生活の軌跡は、どのようなかたちにもせよ記憶される価値があるだろう。まずは本稿がその一つになりえていたら幸いである。

## 付記

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究A）「旧産炭地のネットワーク型再生のための資料救出とアーカイブ構築」分担金、および甲南女子大学平成23年度学術研究及び教育振興奨励基金による研究成果の一部である。また本稿の執筆にあたり、朝日炭鉱元職員の竹林博氏、お

よび NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団には多大なご協力をいただいた。記して感謝したい。

### 注

- 1) 「強制連行」の実態や語の定義についてはここでは深入りしないが、近年では外村 (2012) がきわめて丁寧かつ明快な議論の整理をしている。
- 2) 一般的に、一つの炭鉱施設全体を意味するものとして「炭鉱」、個別の坑道を指すものを「炭坑」として区別されることが多い。本稿では、さらに固有名詞としての朝日炭砦については、「炭砦」の表記を採用している。
- 3) 「出面取り (でめんとり)」とは、「北海道で広く使われて来た方言で、日雇い労働者のことである。語源は明確ではないが、日雇い労働者の稼働を確認することを「でずらとる」と称することから来ているという説がある。また、岩手県九戸郡では労働賃金のことを「でめん」と呼ぶという。さらに、北海道には早くからアメリカの農業技術が導入され、日本語化した英語が少なくないので、「でめん」の語源を英語に求めようとする説もある」。(関 1981)
- 4) 鉱業法第五条によれば、「鉱業権」とは、登録を受けた一定の土地の区域 (鉱区) において、登録を受けた鉱物を掘採し、取得する権利であり、同じく第六条によれば、「租鉱権」とは、他人の鉱区において、鉱業権の目的となっている鉱物を掘採し、取得する権利のことをいう。
- 5) 筆者も執筆者の一人となっている中澤編 (2011) では、急傾斜採炭について、北海道赤平市の住友赤平炭鉱を事例として、その採炭法、その現場に関わった炭鉱マンの生活史の側目から詳しく記述している。
- 6) 当時の朝日炭砦の経営陣の一人であった竹林博さんは、閉山に至った経緯を以下のように語っている。「(道炭労とヤマ元の意図の食い違いが) ありました。……新鉱開発にはだいたいね、250 人のうちの 100 人くらい整理して、140~150 人でね、月産一万トンでやろうかという計画だったんですが、炭労はできるだけ多く使えと。多く使うとなるとやっぱり生産量も増やさなきゃならないんですよ。それは坑内の採掘計画からいくとね、実行できないんですよ。ただ絵に描いたモチであれば描けるけども。……労組の方もやはり地元の決定力というか、判断力を持つにはね、精神的なバックアップがとれなかったんじゃないかとね。やっぱり炭労がダメだといったらね、大きな組織の中の組織ですから」(2012 年 2 月の聞き取りより)。
- 7) 2011 年 8 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 8) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 9) 2012 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 10) 2012 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 11) 2012 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 12) 2012 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 13) 2012 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 14) 2012 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 15) 2011 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。

- 16) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 17) 「田んぼ行ったらね、もうお昼にはお金もらうの。300 円なら 300 円で、お昼ごはん食べたなら親方から。そうすると時間になったらさーっと帰れるでしょ。たいていお昼に精算。よっぽど慣れてる人で何日分ってまとめてくれる家もあるけどね」(2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより)。
- 18) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 19) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 20) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 21) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 22) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 23) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 24) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 25) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 26) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。
- 27) 西成田は後述するような、炭鉱女性への副業奨励、福利施設や強化組織の展開にふれつつ、採炭過程の機械化が女性労働の周辺化の主な要因であると指摘している (西成田 1985)。
- 28) 「空知支庁でもね、北海道の炭鉱地帯の地図を描いても、……夕張のそこは小ヤマが全部入ってるんですよ。それがね、この岩見沢を中心にした万字線と幾春別線の、いわば大手もね、……地図に出てこないんですよ。岩見沢から万字炭山まで。美流渡とか朝日は全然ね、無視なんですよ。なんもない」(2011 年 8 月、竹林博さんへの聞き取りより)。
- 29) 2012 年 2 月、竹林博さんへの聞き取りより。
- 30) 「苗代の播種期は五月上旬から四月上旬へ、移植期も六月上旬から五月下旬へと早まってきた。これとともに田植え労力が年を追って不足し農家を悩ませた。ここにも機械力の進出があり、水田農家の夢とまでされた田植え機が昭和四十五年 (一九七〇) ごろよりそろそろ普及し出してきた。農機具業界の必死の開発により田植え機の普及は年を追って増加した。加えて苗作りも田植え機に併せて行うような作業となり、短期間に田植えができるため、田植えの時期から逆算して苗作りをするようになった。かつての出面さんが腰に苗缶をぶらさげて、腰を曲げ一株一株土の中に苗を差し込む田植え作業は見られなくなった。」(北村史編纂委員会 1985: 1008)
- 31) 2012 年 8 月、金子清子さんへの聞き取りより。

### 参考文献

- 朝日炭砦株式会社, 1963, 『朝日炭砦案内』。  
 北海道立総合経済研究所, 1963, 『北海道農業発達史Ⅱ』  
 中央公論事業出版。  
 岩見沢市, 1963, 『岩見沢市史』。  
 岩見沢市・栗沢町, 1986, 『鉄路とともにー国鉄万字線史』。  
 岩見沢市水道部上水道史編纂委員会編, 1978, 『岩見沢市上水道史』。  
 川崎茂, 1973, 『日本の鉱山集落』 大明堂。  
 北村史編纂委員会, 1985, 『北村史 上巻』 北村役場。

- 中澤秀雄，2011，「超縮小社会の破綻と再生？－空知旧産炭地と地域政策」『地域社会学会年報』23：19-33.
- 編，2011，『炭鉱労働の実際－住友赤平炭鉱の場合』科学研究費補助金基盤研究 A「旧産炭地のネットワーク型再生のための資料救出とアーカイブ構築」研究成果中間報告書).
- 西成田豊，1985，「石炭鉱業の技術革新と女子労働」中村政則編『技術革新と女子労働』東京大学出版会.
- 野依智子，2010，『近代筑豊炭鉱における女性労働と家族－「家族賃金」観念と「家庭イデオロギー」の形成過程』明石書店.
- 外村大，2012，『朝鮮人強制連行』岩波書店.
- 関秀志，1981，「出面取り」北海道新聞社編『北海道大百科事典 下巻』北海道新聞社，149.
- 内田大和編，2009，『北海道炭鉱資料総覧』空知地方史研究協議会.
- 吉岡宏高，2012，『明るい炭鉱』創元社.
- 夕張市史編纂室編，1991，『夕張市史 追補』夕張市.